事後評価報告書

1. 基本情報

（1） 実行団体名　　公益財団法人身体教育医学研究所

（2） 実行団体事業名　　休眠預金を活用した体験格差解消事業

（3） 資金分配団体名　　公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団

（4） 資金分配団体事業名　　休眠預金を活用した体験格差解消事業

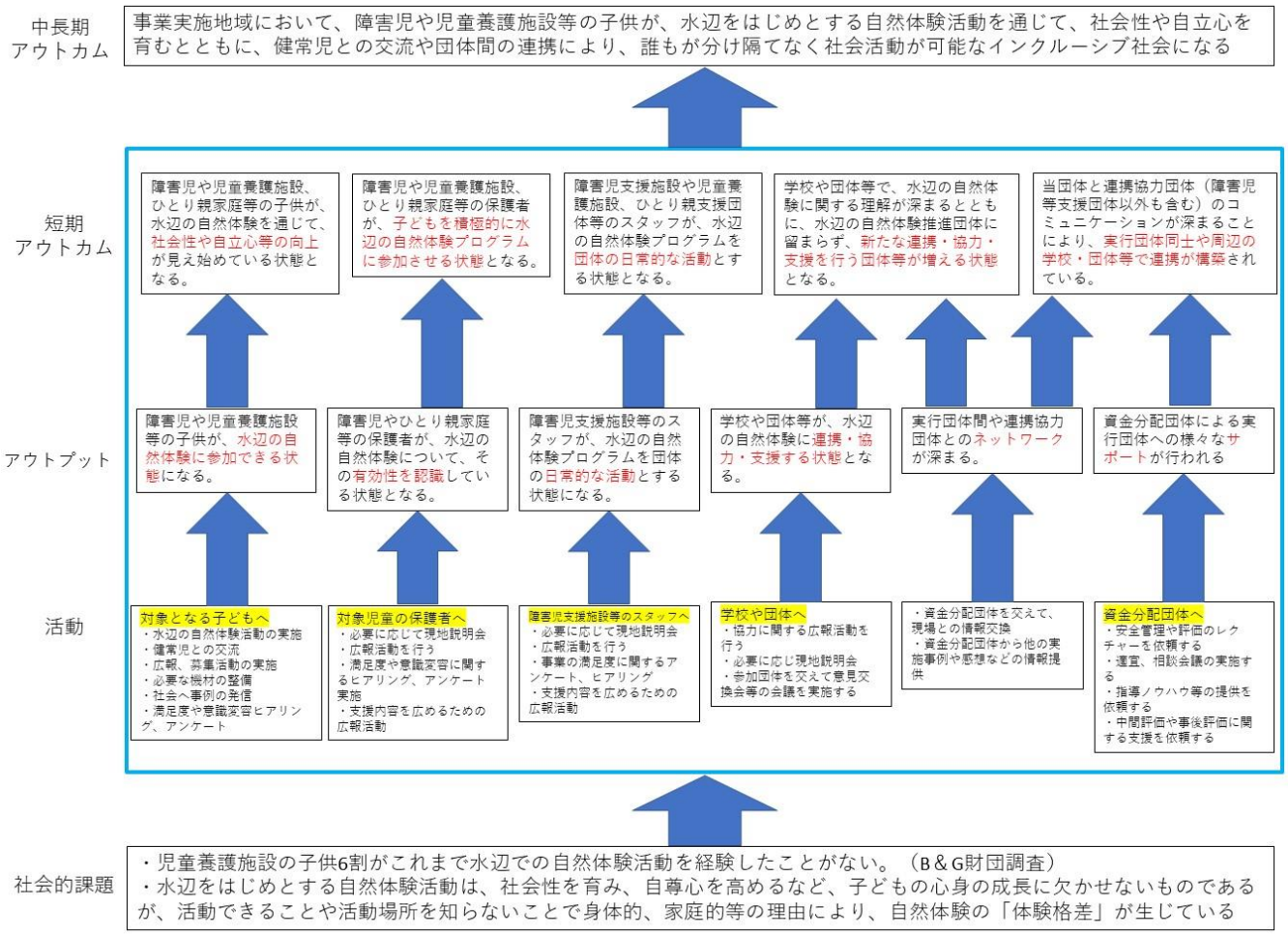
（5） 事業の種類

（草の根活動支援事業／ソーシャルビジネス形成支援事業／イノベーション企画支援事業／災害支援事業のいずれかを記載）

（6） 実施期間　　２０２０年４月～２０２３年３月

（7） 事業対象地域　　長野県東御市

2. 事業概要



3. 事後評価実施概要

（1） 実施概要

①どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか

水辺の自然体験への継続的な参加を通して、子供・保護者・スタッフそれぞれの意識と行動の両面にプラスの変化を及ぼすことを重要なポイントとして設定し、評価を実施した。

②どんな調査で測定したのか

◎子供・保護者・スタッフの意識や行動等に関する短期アウトカムの評価【定量的な評価】

1）調査方法

・アンケート調査

対象：居場所活動に参加する子供。

対象となる子供が属する家庭は、市や社協の相談事業に関わる家庭。子ども自身の障がい（発達、知的）や、家庭における課題（貧困、多子、ひとり親、親の障がい等）を抱え、相談に訪れる。）

自尊感情（24 問 4 件法）、生き抜く態度（25 問 5 件法）、学校生活コミュニケーションスキル（5 問 5 件法）、自己効力感（32 問 4 件法）、包括的ストレス反応（17 問 4 件法）、生活充実感（6 問 4 件法）

成人（保護者・スタッフ）

主観的幸福感（4 問 7 件法）、自尊感情（10 問 4 件法）、ワークエンゲイジメント（17 問 7 件法）、自己効力感（23 問 5 件法）質問紙で把握した

2）調査実施時期（前後比較による事後評価のため、調査総期間を記載）

・2020 年 7 月～2022 年 12 月

3）調査対象者

・事業の対象となった 65 人のうち，有効回答者数 23 人（有効回答率 35%）であった。

調査対象者は、子供 24 人、成人 41 人。有効回答者は、子供 9 人、成人 14 人。

4）分析方法

・すべての尺度の得点の前後比較（ノンパラメトリック（Wilcoxon の符号付順位検定）を行った。

◎関係者の水辺の自然体験に対する意識向上に関する短期アウトカムの評価【定性的な評価】

1）調査方法

・集合面接調査（半構造化グループインタビュー）

2）調査実施時期

・2022 年 12 月

3）調査対象者

・事業にスタッフとして関わった 39 人のうち，事業への関与が大きかった 4 人を対象にした。メンバーは、連携協力団体からの推薦で選定した。

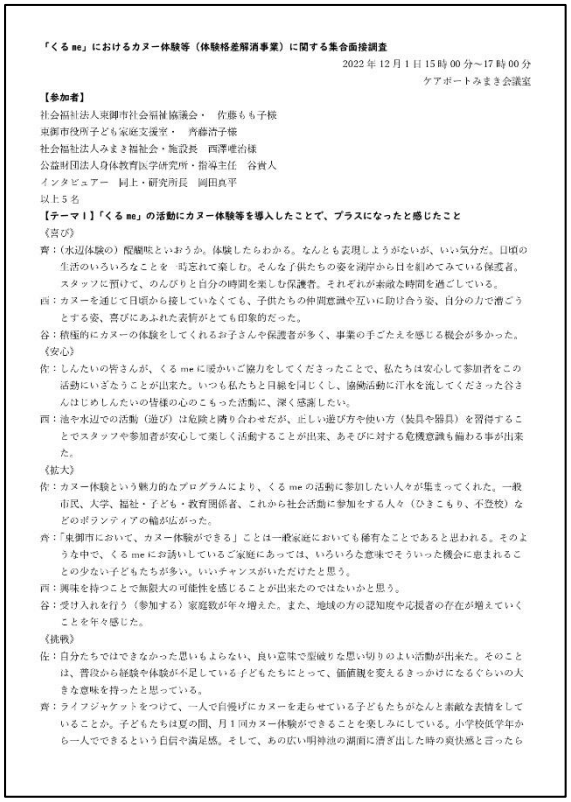
4）分析方法

・調査から得られたエピソードをロジックモデルの枠組みで分析した。

③調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

資料別添１：「くる me」子供・保護者・スタッフの意識や行動等に関するアンケートまとめ

資料別添２：東御市社会福祉協議会との連携による休眠預金活用事業「くる me」におけるカヌー体験等（体験格差解消事業）に関する関係者集合面接調査　ヒアリングおよび結果まとめ



「くる me」におけるカヌー体験等（体験格差解消事業）に関する集合面接調査

2022 年 12 月 1 日 15 時 00 分～17 時 00 分
ケアポートみまき会議室

【参加者】
社会福祉法人東御市社会福祉協議会・　佐藤もも子様
東御市役所子ども家庭支援室・　斉藤浩子様
社会福祉法人みまき福祉会・施設長　西澤慶治様
公益財団法人身体教育医学研究所・指導主任　谷貴人
インタビュアー　同上・研究所長　岡田真平
以上５名

【テーマ１】「くる me」の活動にカヌー体験等を導入したことで、プラスになったと感じたこと

《喜び》

齊：（水辺体験の）醍醐味といおうか。体験したらわかる。なんとも表現しようがないが、いい気分だ。日頃の生活のいろいろなことを一時忘れて楽しむ。そんな子供たちの姿を河岸から目を細めてみている保護者。スタッフに預けて、のんびりと自分の時間を楽しむ保護者。それぞれが素敵な時間を過ごしている。

西：カヌーを通じて日頃から接していなくても、子供たちの仲間意識や互いに助け合う姿、自分の力で漕ごうとする姿、喜びにあふれた表情がとても印象的だった。

谷：積極的にカヌーの体験をしてくれるお子さんや保護者が多く、事業の手ごたえを感じる機会が多かった。

《安心》

佐：しんたいの皆さんが、くる me に暖かいご協力をしてくださったことで、私たちは安心して参加者をこの活動にいざなうことが出来た。いつも私たちと目線を同じくし、協働活動に汗水を流してくださった谷さんはじめしんたいの皆様の心のこもった活動に、深く感謝したい。

西：池や水辺での活動（遊び）は危険と隣り合わせだが、正しい遊び方や使い方（装具や器具）を習得することでスタッフや参加者が安心して楽しく活動することが出来、あそびに対する危機意識も備わる事が出来た。

《拡大》

佐：カヌー体験という魅力的なプログラムにより、くる me の活動に参加したい人々が集まってくれた。一般市民、大学、福祉・子ども・教育関係者、これから社会活動に参加をする人々（ひきこもり、不登校）などのボランティアの輪が広がった。

齊：「東御市において、カヌー体験ができる」ことは一般家庭においても稀有なことであると思われる。そのような中で、くる me にお誘いしているご家庭にあっては、いろいろな意味でそういった機会に恵まれることの少ない子どもたちが多い。いいチャンスがいただけたと思う。

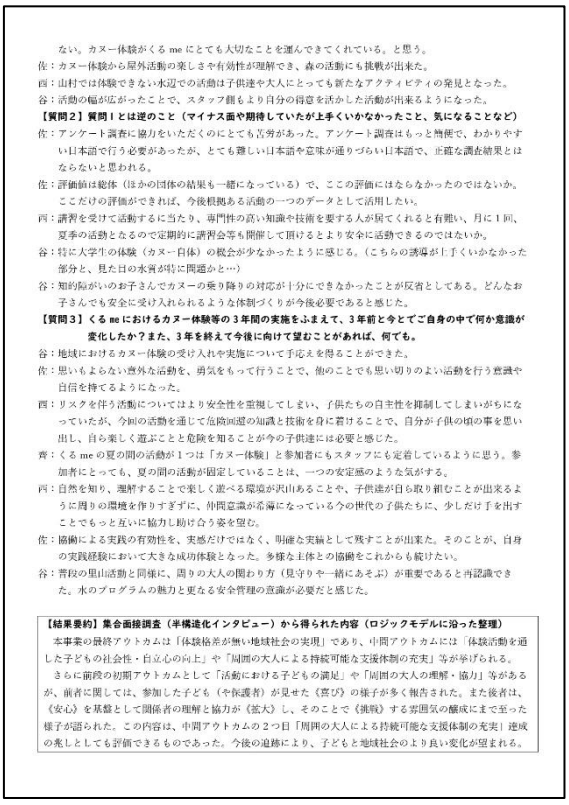
西：興味を持つことで無限大の可能性を感じることが出来たのではないかと思う。

谷：受け入れを行う（参加する）家庭数が年々増えた。また、地域の方の認知度や応援者の存在が増えていくことを年々感じた。

《挑戦》

佐：自分たちではできなかった思いもよらない、良い意味で脅威な思い切りのよい活動が出来た。そのことは、普段から経験や体験が不足している子どもたちにとって、価値観を変えるきっかけになるぐらいの大きな意味を持ったと思っている。

齊：ライフジャケットをつけて、一人で自慢げにカヌーを走らせている子どもたちがなんと素敵な表情をしていることか。子どもたちは夏の間、月１回カヌー体験ができることを楽しみにしている。小学校低学年から一人でできるという自信や満足感。そして、あの広い明神池の湖面に漕ぎ出した時の爽快感と言ったら



ない。カヌー体験がくる me にとても大切なことを運んできてくれている。と思う。

佐：カヌー体験から屋外活動の楽しさや有効性が理解でき、森の活動にも挑戦が出来た。

西：山村では体験できない水辺での活動は子供達や大人にとっても新たなアクティビティの発見となった。

谷：活動の幅が広がったことで、スタッフ側もより自分の得意を活かした活動が出来るようになった。

【質問２】質問１とは逆のこと（マイナス面や期待していたが上手くいかなかったこと、気になることなど）

佐：アンケート調査に協力をいただくのにとても苦労があった。アンケート調査はもっと簡便で、わかりやすい日本語で行う必要があったが、とても難しい日本語や意味が通りづらい日本語で、正確な調査結果とはならないと思われる。

佐：評価値は総体（ほかの団体の結果も一緒になっている）で、ここの評価にはならなかったのではないか。ここだけの評価ができれば、今後根拠ある活動の一つのデータとして活用したい。

西：講習を受けて活動するに当たり、専門性の高い知識や技術を要する人が居てくれると有難い、月に１回、夏季の活動となるので定期的に講習会等も開催して頂けるとより安全に活動できるのではないか。

谷：特に大学生の体験（カヌー自体）の機会が少なかったように感じる。（こちらの誘導が上手くいかなかった部分と、見た目の水質が特に関西かと…）

谷：知的障がいのお子さんでカヌーの乗り降りの対応が十分にできなかったことが反省としてある。どんなお子さんでも安全に受け入れられるような体制づくりが今後必要であると感じた。

【質問３】くる me におけるカヌー体験等の３年間の実施をふまえて、３年前と今とでご自身の中で何か意識が変化したか？また、３年を終えて今後に向けて望むことがあれば、何でも。

谷：地域におけるカヌー体験の受け入れや実施について手応えを得ることができた。

佐：思いもよらない意外な活動を、勇気をもって行うことで、働のことでも思い切りのよい活動を行う意識や自信を持てるようになった。

西：リスクを伴う活動についてはより安全性を重視してしまい、子供たちの自主性を抑制してしまいがちになっていたが、今回の活動を通じて危険回避の知識と技術を身に着けることで、自分が子供の頃の事を思い出し、自ら楽しく遊ぶことと危険を知ることが今の子供達には必要と感じた。

齊：くる me の夏の間の活動が１つは「カヌー体験」と参加者にもスタッフにも定着しているように思う。参加者にとっても、夏の間の活動が固定していることは、一つの安定感のような気がする。

西：自然を知り、理解することで楽しく遊べる環境が沢山あることや、子供達が自ら取り組むことが出来るように周りの環境を作りすぎずに、仲間意識が希薄になっている今の世代の子供たちに、少しだけ手を出すことでもっと互いに協力し助け合う姿を望む。

佐：協働による実践の有効性を、実感だけではなく、明確な実績として残すことが出来た。そのことが、自身の実践経験において大きな成功体験となった。多様な主体との協働をこれからも続けたい。

谷：普段の里山活動と同様に、周りの大人の関わり方（見守りや一緒にあそぶ）が重要であると再認識できた。水のプログラムの魅力と更なる安全管理の意識が必要だと感じた。

【結果要約】集合面接調査（半構造化インタビュー）から得られた内容（ロジックモデルに沿った整理）

本事業の最終アウトカムは「体験格差が無い地域社会の実現」であり、中間アウトカムには「体験活動を通した子どもの社会性・自立心の向上」や「周囲の大人による持続可能な支援体制の充実」等が挙げられる。

さらに前段の初期アウトカムとして「活動における子どもの満足」や「周囲の大人の理解・協力」等があるが、前者に関しては、参加した子ども（や保護者）が見せた《喜び》の様子が多く報告された。また後者は、《安心》を基盤として関係者の理解と協力が《拡大》し、そのことで《挑戦》する雰囲気の醸成にまで至った様子が語られた。この内容は、中間アウトカムの２つ目「周囲の大人による持続可能な支援体制の充実」達成の兆しとしても評価できるものであった。今後の追跡により、子どもと地域社会のより良い変化が望まれる。

（２） 実施体制（内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職）

身体教育医学研究所内部で評価を実施

担当の役割

・事業全般に関する評価　岡田真平（研究所長）

・アウトカム評価　半田秀一（研究部長）

・アウトプット評価　岡田佳澄（総務主任）

4. 事業の実績

4 - 1 インプット（主要なものを記載）

（1） 人材（主に活動していたメンバーの人数や役割など）

・内部人材：合計 4 人。渡邉真也（担当）、谷貴人（担当）、上薗美千代（指導スタッフ）、鈴木清香（指導スタッフ）

・外部人材：合計 10 人

（2） 資機材（主要なもの）

シットオンカヤック、パドル、ライフジャケット、救命ロープ、ガスボイラーなど

（3） 経費実績　助成金の合計（円）

① 契約当初の計画金額：4,085,000 円

② 実際に投入した金額：5,275,000 円

（4） 自己資金（円）

① 契約当初の自己資金の計画金額：1,021,525 円

② 実際に投入した自己資金の金額と種類：1,026,903 円

③ 資金調達で工夫した点：特になし。採択された事業計・資金画に則り自己資金を投入した。

4 - 2 活動とアウトプットの実績

（1） 主な活動

〇子ども誰でも居場所「くる me」（子ども食堂）におけるカヌー・SUP 体験、自然体験活動（里山遊び） 2020,2021,2022 年度

〇カヌー・SUP 体験

・総合型地域スポーツクラブ SanyTOMI カヌー体験　2021,2022 年度

・みまきっ子体験クラブ カヌー体験　2020,2021,2022 年度

・里山探検 カヌー体験　2020 年度

・北御牧中学校カヌー・SUP 体験（修学旅行代替事業） 2021 年度

・日本体育大学野外活動実習カヌー・SUP 体験　2021,2022 年度

〇教職員向けカヌー体験会　2022 年度

〇B&G 海洋性レクリエーション指導員（リーダー）研修会　2020,2021 年度

実績一覧

	子ども食堂		その他活動	
	回数	人数	回数	人数
2020年度	6	348	7	310
2021年度	8	502	11	327
2022年度	7	427	11	273
合計	21	1277	29	910

（2）アウトプットの実績

【アウトプットに関する記載項目】

① アウトプット
② 指標
③ 初期値
④ 目標値
⑤ 目標達成時期（事業計画書に記載した時期）
⑥ 実績値

①アウトプット	②指標	初期値	目標値	目標達成時期	現在の指標の達成状況➡実績値
1．障害児や児童養護施設等の子供が、水辺の自然体験に参加できる状態となる。	①水辺の自然体験に参加した対象となる子供の数 ②水辺の自然体験を見学した対象となる子供の数 ③水辺の自然体験に参加・見学した対象となる子供の満足度 ④水辺の自然体験に協力したサポーターの数	①水辺の自然体験に参加した対象となる子供の数 ②水辺の自然体験を見学した対象となる子供の数 ③水辺の自然体験に参加・見学した対象となる子供の満足度 ④水辺の自然体験に協力したサポーターの数	①地域全体で75人（初期値から5倍） ②地域全体で75人（初期値から5倍） ③満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ④地域全体で75人（初期値から5倍）	2023 年 2 月	①65 人（延べ 480 人） ②65 人 ③満足者割合（継続希望）が 65%から 83%に向上した。 ④79 人
2．障害児やひとり親家庭等の	①水辺の自然体験を見学した保護者の数	①地域全体で15人	①地域全体で75人（初期値か	2023 年 2 月	①35 人（延べ 282 人）

保護者が、水辺の自然体験について、その有効性を認識している状態となる。	②水辺の自然体験を見学した保護者の満足度	②満足度調査（ベースライン調査）	ら５倍） ②満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）		②満足者割合（継続希望）が 63%から 94％に向上した。
３．障害児支援施設や児童養護施設、ひとり親支援団体等のスタッフが、水辺の自然体験について、その有効性を認識している状態となる。	①水辺の自然体験を見学したスタッフの数 ②水辺の自然体験を見学したスタッフの満足度	①地域全体で１５人 ②満足度調査（ベースライン調査）	①地域全体で７５人（初期値から５倍） ②満足度調査（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	2023 年 2 月	①79 人 ②満足者割合（継続希望）が当初 81％で 85％になった。
４．学校や団体等が、水辺の自然体験に連携・協力・支援する状態となる。	①連携・協力・支援する学校・団体等の数 ②水辺の自然体験推進団体以外で連携･協力･支援する学校・団体等の数 ③水辺の自然体験を見学した学校・団体等の数	①地域全体で５事業者 ②地域全体で５事業者 ③地域全体で５事業者	①地域全体で１０事業者（初期値の２倍） ②地域全体で１０事業者（初期値の２倍） ③地域全体で１０事業者（初期値の２倍）	2023 年 2 月	①9 団体 （社協、みまき福祉会、市福祉課､市教育委員会、長大、女短、佐久大、Sany、楽育） ②2 (八重原土地改良区、東御市振興公社) ③7 (青少年支援チーム※市不登校児支援組織、４小学校教諭、北御牧中、日体大)
５．実行団体間や連携協力団体とのネットワークが深まる。	①実行団体間や連携協力団体と定期的なコミュニケーションがある団体の数 ②地域の連携協力団体等と協議する会議等の回数 ③実行団体間の事例等を共有する会議等の回数	①5 団体 ②0 回 ③全実行団体で年１回の会議開"	①10 団体 ②3 回 ③全実行団体で年２回以上の開催	2023 年 2 月	10 団体 （4-①に＋オーシャンファミリーさん） ②33 回 ③5 回 （オンライン全体会議）

６．資金分配団体と様々な情報交換が行われる。	①資金分配団体と会議の開催や情報提供などサポートを受けた回数など	①年に１回の資金分配団体と全実行団体との会議の開催 ②月に１回の資金分配団体との対面会議（ネットによる会議を含む）の開催"	①年に２回の資金分配団体と全実行団体による会議の開催 ②月に１回以上の資金分配団体との対面会議（ネットによる会議を含む）の開催	2023 年 2 月	①5 回 ②11 回
7. 新型コロナウイルス感染症対策を講じたことにより、参加者・スタッフが安全に水辺の体験活動に参加	①器材等の拡充及び必要な人材を確保することで三密対策等の安全対策を講じた事業が実施できている	①活動において新型コロナウイルス感染症の安全対策が不十分な状態	①活動において新型コロナウイルス感染症の十分な安全対策を講じて事業を実施している状態	2023 年 2 月	密を避けるための休憩器材や消毒用品の拡充、および基本的な対策（マスク、手指消毒、体調チェック）によって、安全に活動が実施できている。

４-３外部との連携の実績

・活動においては、対象者の把握の部分で行政、市社協との連携が必須となった。
その理由として、行政内で本事業の対象になり得るであろうご家庭を把握していたことと、まいさぽ（生活就労支援センター）の機能を市社協が有しており、既に各種相談事業から支援活動を実施してきていたことが挙げられる。更に活動自体には、社会福祉法人、近隣の大学、市民ボランティア等に関わっていただけた。

・主催団体間（市社協、みまき福祉会、しんたい）では、活動に併せた事前ミーティングとして、参加者、スタッフの人数把握・情報共有、次回タイムスケジュール・活動内容の確認、前回活動の振り返りなどを含む定期的なミーティングを、月１～２回程度行った。(オンライン併用)

・活動中には、スタッフを大きく３つの役割（「水辺での活動」「陸地での活動」「参加者個別」）に分担した。水辺→本事業実行団体（しんたい中心)、陸地→事務局（社協さん中心)、参加者個別→大学生というような形態。

・参加前には、全家庭に参加同意書の記入をお願いした。
理由としては、それまで実施していた屋内のみでの活動に比べると、活動におけるリスクが格段に上がる為、その理解と意識啓発の為。また、活動時に撮影した写真の報告書等での利用許

可を得る為。

・参加者、スタッフという立ち位置はあるものの、参加者（保護者）がスタッフ的な立ち回りもご協力いただくなど、垣根を超えた連携が図れた。

・実際の活動外では、資金分配団体である B&G 財団さんにご紹介いただき、同じく実行団体のオーシャンファミリーさんにスタッフ研修の受け入れをしていただいた。

5. アウトカムの分析

5－1. アウトカムの達成度

（1）短期アウトカムの計画と実績

(2)短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期
1. 障害児や児童養護施設、ひとり親家庭等の子供が、水辺の自然体験を通じて、社会性や自立心などの向上が見え始めている状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する障害児等の人数 ②社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①子供の継続参加に対する意識（ベースライン調査） ②子供の社会性などに対する意識・行動（ベースライン調査）	①子供の継続参加に対する意識（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ②子供の社会性などに対する意識・行動（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	2022年11月
2. 障害児やひとり親家庭等の保護者が、子どもを積極的に、水辺の自然体験プログラムに参加させる状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する障害児等の保護者の人数 ②保護者から見た子供の社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①保護者の継続参加に対する意識（ベースライン調査） ②保護者から見た子供の社会性などに対する意識・行動（ベースライン調査）	①保護者の継続参加に対する意識（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ②保護者から見た子供の社会性などに対する意識・行動（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	2022年11月
3. 障害児支援施設や児童養護施設、ひとり親支援団体等のスタッフが、水辺の自然体験プログラムを団体の日常的な活動とする状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する障害児等が所属する施設等スタッフの人数 ②施設等のスタッフから見た子供の社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①施設スタッフの継続参加に対する意識（ベースライン調査） ②施設スタッフから見た子供の社会性などに対する意識・行動（ベースライン調査）	①施設スタッフの継続参加に対する意識（エンドライン調査を行いベースラインと比較する） ②施設スタッフから見た子供の社会性などに対する意識・行動（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	2022年11月
4. 学校や団体等で、水辺の自然体験に関する理解が深まるとともに、水辺の自然体験推進団体に留まらず、新たな連携・協力・支援を行う団体等が増える状態となる。	①水辺の自然体験の推進に積極的に取り組む・つながっている学校や団体の数 ②水辺の自然体験推進団体以外で、新たにつながっている団体の数 ③水辺の自然体験に対する学校や団体関係者の意識	①地域全体で0ヵ所（ベースライン調査で特定する） ②地域全体で2ヵ所（ベースライン調査で特定する） ③学校や団体関係者の意識（ベースライン調査）	①地域全体で3ヵ所（初期値より3カ所増加） ②地域全体で5ヵ所（初期値より3カ所増加） ③学校や団体関係者の意識（エンドライン調査を行いベースラインと比較する）	2022年11月
5. 当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）のコミュニケーションが深まることにより、実行団体同士や周辺の学校・団体等の連携が構築される。	①当団体と連携協力団体間のつながりの数 ②当団体と連携協力団体間のつながりの質	①1（東御市福祉部門） ②事業協力支援、関連団体の紹介	①つながる連携協力団体の増加（初期値より増加） ②つながりの質の向上（初期状態把握後、目標を設定する）	①2023年2月 ②2023年2月
6. 、新型コロナウイルス感染症予防対策の拡充により、参加者・スタッフ等の感染予防意識や対策が深まることにより、新たな事業様式が見え始めている状態となる。	①新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた新たな事業様式を実施した状態	①新型コロナウイルス感染症の安全対策のみに対応した状態	①新型コロナウイルス感染症の安全対策に創意工夫を加え効率的な事業を実施している状態	2021年7月

アウトカム発現状況（実績）

短期アウトカム	指標	目標値	アウトカム発現状況（実績）
1．障害児や児童養護施設、ひとり親家庭等の子供が、水辺の自然体験を通じて、社会性や自立心などの向上が見え始めている状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する障害児等の人数 ②社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①子供の継続参加に対する意識（ベースラインと比較して向上） ②子供の社会性などに対する意識・行動（ベースラインと比較して向上）	①継続参加希望率が 83.3%に向上していた。 ②生活充実感尺度に有意な向上が見られ、生き抜く態度尺度にも向上傾向が見られた。
2．障害児やひとり親家庭等の保護者が、水辺の自然体験プロ	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する	①保護者の継続参加に対する意識（ベースライ	①継続参加希望率が 94.1%に向上していた。

グラムに参加させる状態となる。	障害児等の保護者の人数 ②保護者から見た子供の社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	ンと比較して向上） ②保護者から見た子供の社会性などに対する意識・行動（ベースラインと比較して向上）	②（成人アンケートの保護者結果で代替）　保護者の主観的幸福感、自尊感情、ワークエンゲイジメント、自己効力感のいずれも向上は見られなかった。
３．障害児支援施設や児童養護施設、ひとり親支援団体等のスタッフが、水辺の自然体験プログラムを日常的な活動とする状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する障害児等が所属する施設等のスタッフの人数 ②施設等のスタッフから見た子供の社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①施設スタッフの継続参加に対する意識（ベースラインと比較して向上） ②施設スタッフから見た子供の社会性などに対する意識・行動（ベースラインと比較して向上）	①継続参加希望率が 84.6%であった。 ②（成人アンケートのスタッフ結果で代替）　スタッフの自尊感情が回を重ねるごとに有意に向上し、自己効力感に関してもややその傾向が見られた。主観的幸福感とワークエンゲイジメントの向上は見られなかった。
４．学校や団体等で、水辺の自然体験に対する理解が深まるとともに、水辺の自然体験推進団体に留まらず、新たな連携・協力・支援を行う団体等が増える状態となる。	①水辺の自然体験活動の推進に積極的に取り組む・つながっている学校・団体等の数 ②水辺の自然体験推進団体以外で、新たにつながっている団体の数 ③水辺の自然体験に対する学校や団体関係者の意識	①地域全体で 3 か所（初期値より 3 か所増加） ②地域全体で 2 か所（初期値より 2 か所増加） ③学校や団体関係者の意識（ベースラインと比較して向上）	①3 か所（北小、北中、日体大） ②6 か所（社協、みまき福祉会、佐久大、長野大学、上田女短、Sany TOMI） ③水辺の自然体験の価値を肯定的に捉える意識変化が見られた。
５．当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）のコミュニケーションが深まることにより、実行団体同士や周辺の学校・団体等の連携が構築される。	①当団体と連携協力団体間のつながりの数 ②当団体と連携協力団体間のつながりの質	①つながる連携協力団体の増加（初期値より増加） ②つながりの質の向上	①4 団体（東御市福祉部門に加えて、市教委、社協、みまき福祉会） ②連携協力団体からの能動的な働きかけが得られるようになった。

6. 新型コロナウイルス感染症対策の拡充により、参加者・スタッフ等の感染予防意識や対策が深まることにより、新たな次号様式が見え始めている状態となる。	①新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた新たな事業様式を実施した状態	①新型コロナウイルス感染症の安全対策に創意工夫を加え効率的な事業を実施している状態	①基本的な対策（マスク、手指消毒、体調チェック）を行い、活動時も密集する状況を作り出さないよう配慮した。活動に関わる部分で感染者の発生を防いだ。

① 事前評価時の短期アウトカム

短期アウトカム	指標	目標値	事前評価時の短期アウトカム
１．障害児や児童養護施設、ひとり親家庭等の子供が、水辺の自然体験を通じて、社会性や自立心などの向上が見え始めている状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する障害児等の人数 ②社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①子供の継続参加に対する意識（ベースラインと比較して向上） ②子供の社会性などに対する意識・行動（ベースラインと比較して向上）	①継続参加希望率 64.7% ②非対象児に比べて対象児で、自尊感情、生き抜く態度、学校生活スキル、自己効力感、生活充実感がいずれも低く、ストレスが高かった。
２．障害児やひとり親家庭等の保護者が、水辺の自然体験プログラムに参加させる状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を希望する障害児等の保護者の人数 ②保護者から見た子供の社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①保護者の継続参加に対する意識（ベースラインと比較して向上） ②保護者から見た子供の社会性などに対する意識・行動（ベースラインと比較して向上）	①継続参加希望率 62.5% ②（成人アンケートの保護者結果で代替）　非対象保護者に比べて対象保護者で、主観的幸福感、自尊感情、自己効力感は低く、ワークエンゲイジメントは高かった。
３．障害児支援施設や児童養護施設、ひとり親支援団体等のスタッフが、水辺の自然体験プログラムを日常的な活動とする状態となる。	①水辺の自然体験に継続して参加を既往する障害児等が所属する施設等のスタッフの人数 ②施設等のスタッフから見た子供の社会性の育成や自立心の向上など、意識・行動の変容の向上率	①施設スタッフの継続参加に対する意識（ベースラインと比較して向上） ②施設スタッフから見た子供の社会性などに対する意識・行動（ベースラインと比較して向上）	①継続参加希望率 80.9% ②（成人アンケートのスタッフ結果で代替）　スタッフの主観的幸福感、自尊感情、ワークエンゲイジメント、自己効力感のいずれも保護者よりも低かった。

４．学校や団体等で、水辺の自然体験に対する理解が深まるとともに、水辺の自然体験推進団体に留まらず、新たな連携・協力・支援を行う団体等が増える状態となる。	①水辺の自然体験活動の推進に積極的に取り組む・つながっている学校・団体等の数 ②水辺の自然体験推進団体以外で、新たにつながっている団体の数 ③水辺の自然体験に対する学校や団体関係者の意識	①地域全体で 3 か所（初期値より 3 か所増加） ②地域全体で 2 か所（初期値より 2 か所増加） ③学校や団体関係者の意識（ベースラインと比較して向上）	①0 か所 ②2 か所（東御市、みまき福祉会） ③水辺の自然体験に関しては、効果への期待を抱く半面、労力対効果や、対象者への応用可能性の面で懐疑的であった。
５．当団体と連携協力団体（障害児等支援団体以外も含む）のコミュニケーションが深まることにより、実行団体同士や周辺の学校・団体等の連携が構築される。	①当団体と連携協力団体間のつながりの数 ②当団体と連携協力団体間のつながりの質	①つながる連携協力団体の増加（初期値より増加） ②つながりの質の向上	①1 団体（東御市福祉部門のみ） ②当団体からの働きかけに対して受け身的な協力であった。
6. 新型コロナウイルス感染症対策の拡充により、参加者・スタッフ等の感染予防意識や対策が深まることにより、新たな次号様式が見え始めている状態となる。	①新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた新たな事業様式を実施した状態	①新型コロナウイルス感染症の安全対策に創意工夫を加え効率的な事業を実施している状態	①新型コロナウイルス感染症の安全対策のみに対応した状態

（2）アウトカム達成度についての評価

・対象者・保護者共に継続参加希望率が大きく向上している。一度水辺活動を体験された方は、活動の楽しさや心地よさを感じていただき、活動に定着していただけたことが推察される。今後は体験の機会を増やしていくことも有効な手段であると考えられる。

・参加者とスタッフにおいては、生活充実感尺度や自尊感情等に有意な変化が見られ、活動自体の有効性を強く感じた。現場においても支援者・被支援者が一体となって居場所活動を運営できた。

・協力団体は想定以上に増えたものの、実際に学校活動において水辺の体験を取り入れていただくことは、当所の計画よりも少なくなってしまった。コロナ禍であったことも一つの要因と考えられるが、今後も学校との連携については粘り強くアプローチしていきたい。

5－2. 波及効果（想定外、波及的・副次的効果）

・今回の事業を通して、水辺の体験活動における基盤の整備が整った。当初想定していた子ども食堂へのアプローチの他、教職員向けの体験会や、修学旅行の代替事業としての活動の受け入れ等を行うことができた

当初から、コロナ禍への対応として換気の良い屋外での活動を計画立案したこと、また水のスポーツに馴染みの薄い地域であり、その反面、農業用水のため池が多いという地域特性を踏まえた独自性、新規性も考慮している。その結果、地元住民や子供たちへの印象、インパクトという面も効果があったと考える。

・今回の事業をきっかけに養成した指導者の他、元々地元にいたカヌーの愛好家との連携も生まれた。

また地域においてもカヌー体験活動の認知度が向上しており、体験希望の声を頂くことも増えた。

・次年度以降の事業の発展の可能性の一つとして、河川（地域資源）の活用についても話があがり、フィールドの下見や道具の準備も進めることとなった。

5－3. 事業の効率性

・今回、水辺の事業を初めて実施していくということで、資金の大半をカヌーやパドル、ライフジャケット等の基本的な活動道具の購入に充てた。ライフジャケットは大きく 3 つのサイズを合計で 100 着近く用意ができたことで、活動の形態（対象者や人数など）に併せて柔軟に対応ができた。これは、3 ヵ年の休眠預金事業の契約期間のみならず、地域における水辺活動の認知、経験者の拡大を、4 年目以降も並行、継続して行うことで、同じ「地域住民」である「障害や経済的困窮など問題を抱えている子供たち」を、将来にわたってすくい上げることに繋がるとものと考える。将来にわたる事業の継続性が担保されることで、投入された資金の効果がより長きにわたって効果を発揮できると考える。

　コロナ追加助成では、密集を避けるためにタープや机、イス、陸上での体験活動道具を購入し、活動内での人の分散に役立てることができた。特にタープは、活動の中における「居場所」の役割を果たし、スタッフとの相談の時間や、活動における着替え場所の代わりなど、様々な用途で使用された。

・船、パドル、ライフジャケットなど活動で使用する基本的な道具は使用頻度が高かった半面、アクアシューズの使用頻度は想定していたよりかなり少なかった。（各自の持ち物として用意されていた。）

・運搬の手間や時間の問題から、船の種類で使用頻度の差が大きく出てしまった。

6. 成功要因・課題

・障がい児やひとり親家庭等の対象家庭について、年を追うごとに母数も増え、更に積極的な参加の様子が見られた。
・初年度は、水辺の体験活動自体が初の取り組みということで、連携団体も限られていたが、地道に活動を重ねていくことで、取り組みの理解も広がり協力・支援団体も増えていった。
・新型コロナウイルス対策については、器材の追加購入や参加者自身の意識変化により、十分な対策を講じて事業の実施に望めた。
・障害児支援施設や児童養護施設との連携について、新型コロナ影響もあり積極的な交流・支援が実施できなかった。
すでに教員向けレクチャーを通じて依頼が届いているが、施設への情報提供や教職員向けの体験会を行い、自然体験活動の理解者を広げていく事で、活動の価値を高め、実施希望、理解者協力者を増やしていきたい。

7. その他深掘り検証項目（任意）

なし。

8. 結論

8-1 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（1）事業実施プロセス				○	
（2）事業成果の達成度				○	

8-2 事業実施の妥当性

・まず水辺の体験活動のベースがほとんどない当地域において、本事業を通して体験活動の基盤が整備された。実際に、本事業を通して出会った子どもたちの大半はカヌーや SUP の体験が初めてであった。
・主の取り組みとなった居場所活動（くる me）については、コロナ禍においても追加支援や実施形態の再検討等を行いながら、当初の計画に近い形でおおよそ月 1 回のペースで事業が実施できた。また地道にも継続して取り組んでいたことで、思わぬところから相談や視察等があり当初想定していなかった事業に繋がった。

・地域における体験会等も毎年実施し、地域住民の理解の獲得へも繋がった。
・水辺の体験活動の他、これまで当団体が取り組んできた地上（森）での体験活動への誘導もでき、参加者・スタッフ共に新たな連携や取り組みに波及した。

9. 提言

・本事業で揃えた器材類については、事業目的以外の活用を検討していくことも重要である。弊団体の場合には、体験格差解消事業を第一に計画しながらも、学校や社会教育活動における体験活動等にも活用・支援を試みた。（地域の子ども達の体験活動、県外からの交流人口の創出等。）
・対象者も様々で、相談機能を持つ行政や民間にそれぞれの情報が集まっている。（今回の事業では、そこに学生や地域ボランティア等を巻き込み、当団体が横串の役割を果たすことができた。）
・当活動においては、各種相談事業から活動に繋げていただく流れが仕組化されており、また事前の申し込み制（出欠）ということになっていた為、必要性の高いご家庭を、スタッフ体制の無理のない範囲で受け入れることができた。

10. 知見・教訓

・居場所活動においては、受け入れ側と参加者側の境界を作りすぎないことの重要性を感じた。参加者（当事者）の方にも受付や子どもたちの見守りの役割をお願いすることで、当事者自身の自己有用感も高まり、また運営も円滑に行うことができたと考える。
・地域の大学との連携が、双方にとって有益であった。特に、当地では福祉系を専攻する学生が多く、一種の実地研修的な役割を果たせたと考える。参加する子どもたちにとっても、多世代での関わりを経験する機会となった。
・参加者の満足度（継続参加率）は比較的高い傾向にあり、一度体験してもらえると継続して参加いただけたと感じている。相談機能をもつ組織と連携をとることで、地域の中での事業対象者を比較的スムーズに活動参加へ結びつけることができた。

11. 資料（別添）

・別添：東御市社会福祉協議会との連携による休眠預金活用事業「くる me」におけるカヌー体験等（体験格差解消事業）に関する関係者集合面接調査　ヒアリングおよび結果まとめ（PDF）

以上

「くる me」におけるカヌー体験等（体験格差解消事業）に関する集合面接調査

2022 年 12 月 1 日 15 時 00 分～17 時 00 分

ケアポートみまき会議室

【参加者】

社会福祉法人東御市社会福祉協議会・　佐藤もも子様

東御市役所子ども家庭支援室・　齊藤清子様

社会福祉法人みまき福祉会・施設長　西澤唯治様

公益財団法人身体教育医学研究所・指導主任　谷貴人

インタビュアー　同上・研究所長　岡田真平

以上 5 名

【テーマⅠ】「くる me」の活動にカヌー体験等を導入したことで、プラスになったと感じたこと

《喜び》

齊：（水辺体験の）醍醐味といおうか。体験したらわかる。なんとも表現しようがないが、いい気分だ。日頃の生活のいろいろなことを一時忘れて楽しむ。そんな子供たちの姿を湖岸から目を細めてみている保護者。スタッフに預けて、のんびりと自分の時間を楽しむ保護者。それぞれが素敵な時間を過ごしている。

西：カヌーを通じて日頃から接していなくても、子供たちの仲間意識や互いに助け合う姿、自分の力で漕ごうとする姿、喜びにあふれた表情がとても印象的だった。

谷：積極的にカヌーの体験をしてくれるお子さんや保護者が多く、事業の手ごたえを感じる機会が多かった。

《安心》

佐：しんたいの皆さんが、くる me に暖かいご協力をしてくださったことで、私たちは安心して参加者をこの活動にいざなうことが出来た。いつも私たちと目線を同じくし、協働活動に汗水を流してくださった谷さんはじめしんたいの皆様の心のこもった活動に、深く感謝したい。

西：池や水辺での活動（遊び）は危険と隣り合わせだが、正しい遊び方や使い方（装具や器具）を習得することでスタッフや参加者が安心して楽しく活動することが出来、あそびに対する危機意識も備わる事が出来た。

《拡大》

佐：カヌー体験という魅力的なプログラムにより、くる me の活動に参加したい人々が集まってくれた。一般市民、大学、福祉・子ども・教育関係者、これから社会活動に参加をする人々（ひきこもり、不登校）などのボランティアの輪が広がった。

齊：「東御市において、カヌー体験ができる」ことは一般家庭においても稀有なことであると思われる。そのような中で、くる me にお誘いしているご家庭にあっては、いろいろな意味でそういった機会に恵まれることの少ない子どもたちが多い。いいチャンスがいただけたと思う。

西：興味を持つことで無限大の可能性を感じることが出来たのではないかと思う。

谷：受け入れを行う（参加する）家庭数が年々増えた。また、地域の方の認知度や応援者の存在が増えていくことを年々感じた。

《挑戦》

佐：自分たちではできなかった思いもよらない、良い意味で型破りな思い切りのよい活動が出来た。そのことは、普段から経験や体験が不足している子どもたちにとって、価値観を変えるきっかけになるぐらいの大きな意味を持ったと思っている。

齊：ライフジャケットをつけて、一人で自慢げにカヌーを走らせている子どもたちがなんと素敵な表情をしていることか。子どもたちは夏の間、月 1 回カヌー体験ができることを楽しみにしている。小学校低学年から一人でできるという自信や満足感。そして、あの広い明神池の湖面に漕ぎ出した時の爽快感と言ったら

ない。カヌー体験がくる me にとても大切なことを運んできてくれている。と思う。

佐：カヌー体験から屋外活動の楽しさや有効性が理解でき、森の活動にも挑戦が出来た。

西：山村では体験できない水辺での活動は子供達や大人にとっても新たなアクティビティの発見となった。

谷：活動の幅が広がったことで、スタッフ側もより自分の得意を活かした活動が出来るようになった。

【質問２】質問１とは逆のこと（マイナス面や期待していたが上手くいかなかったこと、気になることなど）

佐：アンケート調査に協力をいただくのにとても苦労があった。アンケート調査はもっと簡便で、わかりやすい日本語で行う必要があったが、とても難しい日本語や意味が通りづらい日本語で、正確な調査結果とはならないと思われる。

佐：評価値は総体（ほかの団体の結果も一緒になっている）で、ここの評価にはならなかったのではないか。ここだけの評価ができれば、今後根拠ある活動の一つのデータとして活用したい。

西：講習を受けて活動するに当たり、専門性の高い知識や技術を要する人が居てくれると有難い、月に１回、夏季の活動となるので定期的に講習会等も開催して頂けるとより安全に活動できるのではないか。

谷：特に大学生の体験（カヌー自体）の機会が少なかったように感じる。（こちらの誘導が上手くいかなかった部分と、見た目の水質が特に問題かと…）

谷：知的障がいのお子さんでカヌーの乗り降りの対応が十分にできなかったことが反省としてある。どんなお子さんでも安全に受け入れられるような体制づくりが今後必要であると感じた。

【質問３】くる me におけるカヌー体験等の３年間の実施をふまえて、３年前と今とでご自身の中で何か意識が変化したか？また、３年を終えて今後に向けて望むことがあれば、何でも。

谷：地域におけるカヌー体験の受け入れや実施について手応えを得ることができた。

佐：思いもよらない意外な活動を、勇気をもって行うことで、他のことでも思い切りのよい活動を行う意識や自信を持てるようになった。

西：リスクを伴う活動についてはより安全性を重視してしまい、子供たちの自主性を抑制してしまいがちになっていたが、今回の活動を通じて危険回避の知識と技術を身に着けることで、自分が子供の頃の事を思い出し、自ら楽しく遊ぶことと危険を知ることが今の子供達には必要と感じた。

齊：くる me の夏の間の活動が１つは「カヌー体験」と参加者にもスタッフにも定着しているように思う。参加者にとっても、夏の間の活動が固定していることは、一つの安定感のような気がする。

西：自然を知り、理解することで楽しく遊べる環境が沢山あることや、子供達が自ら取り組むことが出来るように周りの環境を作りすぎずに、仲間意識が希薄になっている今の世代の子供たちに、少しだけ手を出すことでもっと互いに協力し助け合う姿を望む。

佐：協働による実践の有効性を、実感だけではなく、明確な実績として残すことが出来た。そのことが、自身の実践経験において大きな成功体験となった。多様な主体との協働をこれからも続けたい。

谷：普段の里山活動と同様に、周りの大人の関わり方（見守りや一緒にあそぶ）が重要であると再認識できた。水のプログラムの魅力と更なる安全管理の意識が必要だと感じた。

【結果要約】集合面接調査（半構造化インタビュー）から得られた内容（ロジックモデルに沿った整理）

本事業の最終アウトカムは「体験格差が無い地域社会の実現」であり、中間アウトカムには「体験活動を通した子どもの社会性・自立心の向上」や「周囲の大人による持続可能な支援体制の充実」等が挙げられる。

さらに前段の初期アウトカムとして「活動における子どもの満足」や「周囲の大人の理解・協力」等があるが、前者に関しては、参加した子ども（や保護者）が見せた《喜び》の様子が多く報告された。また後者は、《安心》を基盤として関係者の理解と協力が《拡大》し、そのことで《挑戦》する雰囲気の醸成にまで至った様子が語られた。この内容は、中間アウトカムの２つ目「周囲の大人による持続可能な支援体制の充実」達成の兆しとしても評価できるものであった。今後の追跡により、子どもと地域社会のより良い変化が望まれる。

「くる me」子供・保護者・スタッフの意識や行動等に関するアンケートまとめ

「くる me」水辺の自然体験活動を通した意識や行動等の変化について、子供には自尊感情・生き抜く態度・学校生活コミュニケーションスキル・自己効力感・包括的ストレス反応・生活充実感の 6 項目のアンケートを行い、24 人の対象者のうち回答可能かつ前後調査ができた 9 人からデータを得た。

また、成人（保護者・スタッフ）には主観的幸福感・自尊感情・ワークエンゲイジメント・自己効力感の 4 項目のアンケートを行い、41 人の対象者のうち繰り返しの回答があった 14 人からデータを得た。

これらのデータについて、各項目の平均スコアを示し、活動参加に伴う変化をノンパラメトリック検定により評価した。

結果は以下の表の通りで、子供では、生活充実感のスコアに有意な向上が見られ（p=0.045、表１）、成人では、自尊感情のスコアの有意な向上が見られた（p=0.014、表２）。

表１　「くる me」水辺の自然体験活動への参加による子供の意識や行動等の変化

	くるme　n=9		
	1回目	2回目	両側p値
自尊感情	3.19 ± 0.45	3.20 ± 0.38	0.812
生き抜く態度	3.98 ± 0.84	4.20 ± 0.73	0.141
学校生活スキル	3.73 ± 0.76	3.67 ± 0.82	0.858
自己効力感	3.04 ± 0.60	3.25 ± 0.61	0.286
包括的ストレス反応	1.20 ± 0.30	1.13 ± 0.16	0.553
生活充実感	3.07 ± 0.77	3.32 ± 0.70	0.045

mean±SD　　対応サンプルによる Wilcoxon の符号付き順位検定

表２　「くる me」水辺の自然体験活動への参加による成人（保護者・スタッフ）の意識や行動等の変化

	くるme　n=14			
	1回目	2回目	3回目	両側p値
主観的幸福感	4.55 ± 1.24	4.68 ± 1.09	4.66 ± 1.12	0.581
自尊感情	2.49 ± 0.39	2.56 ± 0.43	2.71 ± 0.41	0.014
ﾜｰｸｴﾝｹﾞｲｼﾞﾒﾝﾄ	3.58 ± 1.06	3.58 ± 0.89	3.58 ± 0.81	0.929
自己効力感	3.08 ± 0.63	3.13 ± 0.47	3.27 ± 0.55	0.099

mean±SD　　対応サンプルによる Friedman の順位付けによる変数の双方向分析

アンケートは、子供、成人ともに回答しにくさを伴う内容であったために十分な数の回答が得られず、水辺の自然体験活動を通して期待される意識や行動等の多面的な変化を実証するには至らなかった。

ただ、子供は生活充実感の向上に加えて、生き抜く態度や自己効力感にもプラスの効果をもたらす可能性が、成人は自尊感情の向上に加えて、自己効力感にもプラスの効果をもたらす可能性が示されたことから、体験格差の解消を目的とした水辺の自然体験活動を地域で展開・定着させ、参加する子供、保護者、スタッフを増やすことによって、子どもと家庭の支援に貢献することが期待できると考えられた。